



クラブに寄りつかない少年たち

非行少年のグループ指導

永井 三郎

グループ・ワークが少年の非行を防ぐために効果のあることは、しばしば指摘されている処であるが、シェルドン及びエレノア・グリニツク兩氏も、その著「少年非行の解明」(和訳あり)のなかで、精神医が確め得た三四三名の非行のある少年と、三三四名の非行のない少年とが、組織化されたレクリエーションの諸施設をどの程度利用していたかについて比較した処によると、クラブに週二回又はそれ以上出席していたのは、非行のない者の七二・七%に対し、非行のあるものは五九・五%であつた(和訳一七〇頁)。また二二九名の非行のあるものと、二二〇名の非行のない者のうち、友人から勧められて、この種の施設に加入したものは、前者の二五・八%に対し、後者ははるかに大きく四七・八%に達している。これを概観すると、非行のある者の五六・七%は指導的立場にあるプロベーション・オフィサー、パロール・オフィサー、両親、教師などの成人の指図に従つて加入しているのに対し、非行のない者の七〇%は自発的に或いは友人や兄弟姉妹

などに勧められて加入していることが示されている。

この事実に対して兩著者は、右の書の簡約版ともいふべき“*Delinquency in the Making*”に於て「非行少年がクラブのプログラムに参加し、セツトルメント及びその種のレクリエーション・センターに來ないのは、彼らの間には、組織された、指導のもとにある諸活動に加わる意欲があまりないことを示しているものよりである」(九一頁)と述べている。

右はグリニツク氏等の研究の対象となつた北米ボストンの少年のみでなく、日本に於ても見られる処である。ボーイスカウト、YMCA、子供の会などは、少年を正しく導いて、非行に陥らしめない積極的な目的をもつものではあるが、一方には、非行に走るような、いわゆる「手ごわい」少年たちは、この種のグループ・ワーク団体、或いは施設の提供するプログラムには引きつけられて集まつて來ない一面のあることも認めないわけにはゆかない。これでは、よい少年に

は、よりよくなる機会が与えられるが、そうでない少年は益益望ましくない方向に走ることになるのである。しかも後者のような傾向の少年は決してすくなくないことは周知の事実である。

“Delinquency and Human Nature”(非行と人間性)の著者である英国のストット氏(D. H. Stott)も、同国の青少年クラブ運動が過去に於て、その目標を、事実上、社会問題の種とはならない方の対象に限つていたらしいのあつたことを指摘し、前記の書についで一九五二年に著した“Saving Children from Delinquency”(少年非行の救済)の中の第四章「青少年のクラブ」に於てこの問題ととり組んでいる。ソーシアル・グループ・ワークに携わる者にとつて、非行的傾向のある青少年をいかに扱うべきかは、大きな問題であるので、ここに同博士の所説の要点を紹介して見ることにした。

手の及ばない青少年

ストット氏はこれを「クラブに引きつけることのできない者」(Uncluttable)とよび、デュアン・ロビンソン博士は、ロスマンゼルス青少年計畫の報告(Duane Robinson: Chance to Belong, Story of the Los Angeles Youth Project, 1943-1949)の中で「手の届かなる者」(Hard-to-get-at)とよんでゐる(一一七頁)。ともに公共施設や民間団体

の青少年のためのプログラムには何らの興味をも示さず、しかも社会に対しては、すくなくらず迷惑を及ぼしている連中である。

ストット氏はクロザーという一少年の例を次の如く述べてゐる。

ある日は、彼の仲間と地域のユース・クラブまで行つたが、中には入らなかつた。「その辺をうろついて、けんかを売つたりなんかしていたんです」「なぜ君はクラブの中に入つて、その少年たちと一しよにならなかつたのだね」「あの連中は間拔けな奴らだと思つていたからです。ユース・クラブなんか問題になりません」(「非行と人間性」二二〇頁)。

彼らから見れば、クラブ員の連中などは、「女々しい」か「信心臭い」かであり、そんなものと仲間になるのは御免を蒙るという訳である。そのクラブが倫理的に高い水準のものであればあるだけ、その近隣の、このような連中は寄りつかないということになるのである。

このような青少年を導いて、クラブに引き入れようとするには、彼らの性向をよく理解し、殊に、彼らをクラブから遠ざけている性格上の弱点を知らねばならない。このためストット氏は、彼らの間に見出される性格の型を次の如く分けてゐる(「少年非行の救済」四三頁以下)。

一、人とよく交際のできなう、いわゆる、バッド・ミツクサー型。人に対し敵意をもつたり、自分に社交的能力が欠け

ていると思ひ込むことから、人を避ける。しかし一度この障害を乗り越え、非常に親しい友人もできるのだが、誰か自分が心から信頼する人に紹介されない限り、新しい社交グループには近よろうとしない。

二、疑い深い、偏執病的な型。すぐに人が自分を恨んで居るとか、或いは避けているとかいう風に邪推し、またけん責されたりすると、報復的にクラブに來なくなる。この少年たちは人のえこひいきに甚だ敏感でありながら、自分の人に嫌われるのは、自分がよそよしく冷淡であるからであることや、自分が無口なために人に認められずに居ることなどには、少しも氣づかない。また人が親切にしてくれても、とかくその底意を疑つたりして、心からそれに感謝することができない。そればかりでなく、その真意を試そうとしたりして、人にいやがれる。

三、刺激的なことを求める型。悪氣があるというのではないが、たえず、その活動や周囲に変化を求めてやまない。そのため、集中や継続的な努力を必要とするようなことに参加することができない。彼らは、いつも何か面白いことに飛びつこうとしているから、他の人々の悪意から出るそのおかしななどに、すぐついでに行く。悪いことに成功するか否かは、彼らにゲームに勝つか負けるかと同じスリルを感じさせるのである。

四、劣等感が支配的である型。クラブに一番大きなじやま

をするのは、この型の少年たちで、何かにつけ攻撃的な態度に出ることによつて、クラブ内の自分の劣位を償おうとするのである。他の少年たちが静かに読書しているのを邪魔したり、穩かなゲームを楽んで居るのを妨害したり、人の持物をかくして困らせたりするかと思ふと、人の親切な忠告に猛烈に反抗したり、かんしやくを起したりし、また、からいばりや、自慢をして人をいやがらせたりする。

ストット氏は以上四つの特徴的な型を挙げた後に、彼らに共通した点は、彼らがいろいろな不幸な人間関係の経験なめて來たことであるとし、そのため、クラブに加わつたがらない少年たちの、どの一人をとつて見ても、大概この四つの面が、みな見出されると述べて居る。従つてここで問題となるのは、これらの少年たちがクラブ生活を樂しむことができるようにするために、これらの欠陥をいかにして矯正するかということになる。その事情に応じて、その悪い傾向を押さへたり、よいものに転換させたり、或いは、それが忘れられてしまふまでは、他の比較的に害のない、はげ口を与えたりすることが考えられねばならない。そのためには、今まで承認されて來た、一般向きのグループ指導の原理、組織、及び方策などを再考察せねばならないことは明らかであると氏はいうのである。

魅力のあるクラブのあり方

このような性格上の困難をもつ青少年を引きつけるクラブは、それではどんなものでなければならぬか、ストット氏の説を綜合すると次の如くである。

第一にクラブの大きさは、余りに大きくない方がよい。ことに前記の、人によく交際できないバッド・ミツクサーと、疑い深い偏執病的な型の少年の場合には、彼らがいわば、日蔭者といったコップレックスを持つているので、多くの人々の集まつている処では行動がぎごちなくなりがちになるからで、小さなグループでは、よく目がとどくので、誰も、のけ者にされたというような意識を持たずにすむ、また五十人ものグループでは、敵意や攻撃性を示す者も、十二人か或いはそれ以下の小グループではこれを示さないことが多い点から見ても、多数を集めた親しみのないグループよりも、相互に親密さをもつ小グループの方が望ましいことはいうまでもない。

このように、グループに属することにより安定感と、一種の優越感を与えるために入会に際して、よく準備された厳粛な儀式を、たとえばキャンドル・サーヴィスのようなものを行なつたり、或いは、会員となる前に、一定の見習期間を置いたりすることも、特にこの種の少年には有効である。これによつて会員意識を高め、脱落者を最少限に止めることができる、といつて居る。

クラブの運営については、ストット氏は、W・M・イーガー氏

の言を引いて、クラブ内の自治は民主的生活の訓練として価値があるばかりでなく、ある種の少年を引きつけるのには、これ以外の方法はないといつてゐる。自治的ことを進めることによつて、乱暴な連中もいつの間にか自重することを学び、秩序を重んずるようになるのである（イーガー氏の書は、その後次の如く出版された、W. McG. Eager-Making Men, History of Boys' Clubs and Related Movements in Great Britain, 1953）。

この種のクラブは、どんなメンバーを集めて作つたらよいかについては、ストット氏は自分の非行少年を扱つた経験に合致するものとして、パーシー氏（E. F. Piery）の説を次の如く紹介している。

一、年齢がほぼ同じであること。これは最も見やすい要素であるが、クラブ員間の親しい交友も、同じ年齢の者の間に結ばれることの多いのは、この要素の重要性を示している。

二、友達は多く、同じ町、或いは通りから来ている者の間にできる。

三、親しい者の間では、レクリエーションの興味が一致している場合が多い。これは多分、落付かない度合、運動への要求、冒険への探求などに於て、氣質的に共通なものがあるからであらう。

四、地位に上下がない。若い人達は、理性、社会的地位、或いはアチーヴメントの面に於て、自分に比し、余りに優れ

た人や、劣つた人と交わることを嫌う。

五、「類をもつて集まる」ということわざによつて示される精神的な要素。

このような要素が、彼らの間に親しい友情の結ばれることを助け、大人の世界に反抗して、とかくそれに背を向けたがる彼らも、そこに安定感を見出すことになるのである。

この点についてストット氏が特にわれわれの注意を喚起していることは、少年たちは、自分のよく知つてゐる友達がそこに居ないと、日曜学校や、ダンス・クラブなどの新しい場所にはなかなか行きたがらないということである。また一人がやめると、それについて、親しい者たちが、そろつてやめることがよく起るのである。こういう地域的な交友関係の存在が認められるとすれば、大きなクラブのなかに、サブ・クラブ（小さな仲間）を作ることにより、多くの内気な、不安定な少年少女をそれに引きつけることができる筈だといふのである（五〇頁）。かく人があるグループに属するに至る過程に於て、サブ・グループのもつ意義は重視されねばならぬ。

プログラムと施設

このような非行的傾向をもつ少年は、家庭の複雑な事情、或いは性格的な欠陥から、概して家では落つけない環境にあることを思えば、これによい、そして温かい雰囲気をもつ集

まりの場所を与えることの必要は明らかである。それが、空想的な、そして神秘的な気分を漂わしている処であれば、一層魅力をもつことになるのはいうまでもない。それには地域の諸施設の提供をうけることが必要になつてくる。

刺激やスリルを求める連中を悪より遠ざけるためには、今までとはちがつたクラブが考えられねばならない。プログラムでは、彼らに何か冒険をやつてゐるような意識を与えることが望ましい。その意識を与えることに成功すれば、実際に彼らを絶えず危険にさらす必要はないし、またそれは望ましいことでもない。彼らが何か健全な、しかも興奮する娯楽に熱中するようになると、過去の冒険の記憶と、将来の冒険への期待とが、彼らの空想を満足させるに至ることは、丁度釣道楽の大人が、自分の事務室に座しながらも、ます釣を結構楽しみ得ることと同じであるといふのである。

英国の生活文化から割出して、ストット氏は彼らの求める刺激を次の四の型に分類している。

一、捕えられ罰をうける危険を冒す。少年の非行の大部分がこれに当り、玄関のベルを押して逃げることはじめ、人の邸に押入ることまである。

二、かけ事、とばくなどに金をかける。

三、ゲームの勝敗などにうち込む。

四、身体をもつて危険を冒す。これには高所に登つたり、高速度で走つたりすることがある。ストット氏は、昔英国で

はやつた木登りはもうすたつたが、手近かでできる岩壁登りなどを提唱している。またスピードが少年たちに非常な魅力をもつことを認め、戦前たつた五ポンドで買うことのできたオートバイをなつかしがっている。日本の場合では、自転車はこの観点からとり挙げてよいように思う。

最後に挙げた劣等感をもつ型、即ち人に迷惑を及ぼしたり、からいばりすることによつて劣等感を補おうとする少年は、氏の経験によると、一見向こう見ずであるように思われるにも拘わらず、実際は決して勇敢ではなく、仲間の前で体面を保つことさえできれば、そんなに無理をせずに、もつと穩かな道楽に満足を見出すものである。この型の少年に、からいばりの機会を与えることは、彼らの神経を緊張させ、その内心の臆病を昇進させ、なお一層ひどい向こう見ずな行動をやるような結果を招く。この型の少年に対しては、原則としては、望ましい方法で、彼の地位をとり戻す機会を与え、いままでの擬勢的な補償から遠ざけることである。そのためには、その人のもつ理性や、劇、音楽、或いは美術、手芸などの技能、及び体育の面の能力などを活かして用いることが有効である。同時に、この少年達を誘つて、向こう見ずな行為や非行などに陥らせる人たちから、彼らを遠ざけねばならない。

ストット氏は、この型の少年は、他のどの型の少年にも増して、自分の行為の愚かさを覺らせる大人の親切な指導が有

効であると説いている。この点からもグループは先生であると同時に、友人でもあり、よい相談相手でもある指導者のものと集まる小グループでなければならないということになる。

先にも述べたクラブの自治的運営は、この型の劣等感に悩む少年にとつては特別な意味をもつてくる。この少年たちの特徴は、人の命令をうけることをがまんし得ないことである。外部から加えられる規制は、その内容を問はずそれが加えられたというだけでも、乱暴や反抗を挑発するに足るものである。しかし彼らが、その運営に自から加わつているときには、彼らが常に最も気にしている自分の地位がそこなわれたという意識がないから、それに対する反応も全く別のものとなるのである。しかしストット氏は、英国に於けるクラブの自治が嘗てより後退しているような印象をもつことを述べ、青少年クラブ運動が、より広い少年層に達し得ないのは、この原因によるのではないかと、注目すべき疑問を提出している。クラブが民主的に運営されている場合にも、役員の選挙が一年に一回である場合には、その一カ年という期間は少年たちにとつては決して短い期間ではなく、改選後に入会したものには、その役員は、自分の選んだものでないために何となく外部から任命されて自分らに命令する人たちであるような印象をもちがちであると述べていることは特に考えさせられる点である。役員がいつでも任免できるような小グループ

であればもちろん別である。しかし、かく自治を強調することは、決して、クラブの指導者、或いは成人の助力者が、その影響力を放棄すべきであるというのではなく、その人たちも、クラブの民主的な規約を尊重することによつて、かえつてそのもつ、すぐれた判断力と経験によつて、皆の心服を得ることができるといふのである。

指導者と少年

このようなクラブの指導者は、その会員の世界に住み得る人でなければならぬことはいうまでもない。そしてすこしでも少年たちを矯正するのだという風な処があると、少年たちから、自分らを精神的にいじめに來たものと怨まれる。最も大切なことはクラブ員の一人一人を信頼していることを示すことで、感情がそれを許さないときでもそうせねばならない。信頼されていないということを意識すること位、彼らをかき立てて不正直に走らせることはないし、また、いつも疑の目でのみ見られて來た少年たちが、心から信頼されていることを知つた時ほどよろこぶことはない。この時のごく自然的な反応は、この期待に添うように一層努力することである。どんな人も善惡兩面の態度をもちうる備えをもつてゐる。いわゆる人格教育というのは、そのよい面を絶えず働かせて、それを一層容易に働ぎ得るようにし、悪い面は使われないために錆ついて遂には役に立たないようにすることである。

ある。よい反応は他人のよい態度によつてよび起され、わるい反応は、悪い態度によつてよび起されるのである。少年がいつも期待に添ひ得るとは限らないが、信頼されることによつて、それだけよくなることは、人格算術 (Personality-arithmetic) の簡単な法則だとストット氏はいうのである。

附記 筆者は一九五〇年夏ロンドンを訪ねたとき友人の紹介でストット氏に会い、またその講演をきく折を得た。その当時出版されて間のなかつた「非行と人間性」をその友人から贈られてもち歸つたが、その後「少年非行の救済」を読んで教えられる処が多かつた。その最も有益だと思ふ一章の大要をここに紹介する折を与えられたことを感謝するものであるが、ストット氏の意を充分に伝え得なかつたことを謝したい。読者諸賢がストット氏の二著書、及びその他の引用書について直接に究められんことを希うものである。なおロスアンゼルス青少年計畫については、中央青少年問題協議会の「青少年問題」第五号 (一九五二年十一月) に「青少年に參加する喜びを」と題して紹介したことがあるので、ここに付け加えて置く。